



Title	スポーツと社会階層—ボクシングと中国武術を手がかりに
Author(s)	池本, 淳一
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49459
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	いけ 本 淳一
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 22634 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	スポーツと社会階層—ボクシングと中国武術を手がかりに
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 厚東 洋輔 (副査) 教 授 友枝 敏雄 准教授 太郎丸 博

論文内容の要旨

本論の目的はボクシングと中国武術を事例にスポーツと社会階層とのつながりを解明し、スポーツを解き口とした社会構造研究をめざすことにある。そのために本論では、H.ベッカーの文化概念（「文化とは共通の問題に直面した人びとの共通の解決法である」）を援用し、スポーツが社会問題の解決に果たす役割に着目した。同時に、日本と中国の近年の階層格差の下で「不利な立場」にある人びとが、どのようにして格差に起因する「共通の問題」に対処しているのかを検討した。これらの考察を通じて、本論では階層再生産及び階層形成におけるスポーツの役割を実証的に明らかにすることを試みた。

第一章ではJ. Sugdenの『Boxing and society』の検討を通じて、以下の研究指針を得た。本論がボクシングを研究対象に選んだのは、すでに米国の都市社会学者たちによる十分な研究蓄積が存在していたためであるが、それらの多くは都市貧困・人種差別にテーマを絞り、さらに黒人とボクシングとのつながりを自明視していた点で、常識的理解を超えるものではなかった。他方、Sugdenによるアメリカ・北アイルランド・キューバのボクシング・サブカルチャーの比較研究は、ボクシングと各国の「不利な立場」の人々とのつながりを実証するものであった。この成果は、ボクシング研究の射程を貧困・人種問題から各国の階層・格差問題にまで拡大することで、スポーツの階層形成に果たす役割へ眼を向かせただけではなく、ボクシング・サブカルチャーの再考を通じて、欧米中心的なスポーツ文化理解の相対化を促すものであった。さらに申請者は、自らもボクシングの練習へ参加し、ジムの擬似的なメンバーとなるという彼の参与観察のスタイルから、メンバーと同様のスポーツ経験を積むことで、彼らの経験をより彼らに近い立場から理解しうるというスポーツ調査のメリットを、またスポーツを解き口に「不利な立場」の視点から格差の現実を描くという彼の戦略から、格差に関する量的研究と質的研究の間の架橋可能性を見出した。

第二章では、この研究指針を日本に適用するために、大阪の3つのジムでフィールドワークを行い、日本ボクシングとフリーター層とのつながりを実証した。ジムの会員たちの多くは真面目で勤勉であり、学校や職場には十分適応していたものの、「打ちこめるもの」

が見つからず、その「真面目さ」が評価される機会も得られていない若者であった。他方、ボクシングは「打ちこめるもの」の一つであり、加えてジムでは「真面目さ」が高く評価されるために、多くの真面目な若者がジムにやってきていた。入会後、会員たちはボクシングを「仕事」とみなし強固な職業アイデンティティを得るだけではなく、減量や試合前の特訓から「充実感」や「生き甲斐」を得ていた。試合には親戚・知人・友人一同が駆けつけるが、その結果はボクサーの日常的な社会的威信を左右するものとなっていた。さらに「限界」まで辿り着いたと「納得」した時に引退していくことで、ボクサーたちは肯定的アイデンティティを確立しつつ、再就職に相応しいレベルにまでアスピレーションを冷却させていた。

これらの考察から、近年の労働市場の再編成が、高いアスピレーションを持つ勤勉なフリーター層をジョブ・マッチングの不一致に陥らせていること、そして彼らの一部はボクシングを通じて自らそのマッチングを達成していることが明らかとなった。

第三章、第四章ではフィールドを中国へと拡大したが、それは日本における欧米的なスポーツ文化理解を相対化する視点を得るためにある。同時に研究対象を武術に拡大したのは、中国ではボクシングが非常にマイナーであるのに対して、スポーツ化した武術である「競技武術」が非常に盛んであること、さらに武術は歴史的にも農民層と深いつながりを持つ身体文化であり、中国におけるスポーツと階層研究の題材として相応しいためである。

第三章では、二校の武術学校（競技武術の専攻学科を持つ私立の小・中学校及び職業高校）と某大学の武術専攻科でのフィールドワークを通じて、競技武術と農民層・農民工（出稼ぎ農民）層とのつながりを実証した。現在、都市部の武術学校には農村から多くの児童が転入学してくるが、それには次のような背景が存在している。農村では公立小学校の荒廃が甚だしく、多くの学力不足の生徒が存在している。他方、武術学校はスポーツを通じた進学が可能であり、さらにその教育環境は農村よりも充実している。それゆえ多くの農村の保護者が中等学歴取得のため、あるいは基礎学力の養成のために、子どもを武術学校に転入学させていた。加えて近年、子どもをつれて出稼ぎにやってくる農民工世帯が急増しているが、都市戸籍を持たない子どもが都市の公立校へ転校するのは難しく、さらに低収入・長時間勤務の保護者たちが安全で清潔な住居を確保することや、子どもの世話をする余裕を持つこともまた困難である。そのような農民工層にとって転校が容易で学費が安く、さらに安全な学生寮で子どもの衣食の世話をしてくれる武術学校は最適の転校先となっていた。これらの経緯で入学してきた生徒の多くは、小学部卒業と同時に故郷の普通中学へと進学していくものの、一部の生徒たちは中学部・中専部（職業高校部）へと進学し、武術を通じた学歴取得や職業選択を目指してアスピレーションを加熱させていた。さらにこのアスピレーションは、苦労も厭わずに最良の教育機会を与えてくれた親への「恩返し」を目標としていることで、さらに加熱されていた。生徒たちは卒業後、一部の生徒はナショナル・チームや体育大学・教育大学の武術専攻科へ進むものの、その大半は警備員や武術学校の教練として都市部で就職することで、都市移住のための第一歩を踏み出していた。

これらの考察から、近年の急速な経済成長と高学歴化の煽りを受けて、農民層の間にも都市移住や高学歴取得への欲求が生じているものの、都市一農村間の教育格差や都市における社会的排除のためにそれらが妨げられていること、しかしながら一部の農民層・農民工層は、武術学校を通じて都市移住や学歴取得を達成していることが明らかとなった。

しかしこの第三章では、そもそもなぜ武術文化が学歴取得や都市移住と結び付く文化となったのか、は明らかにできなかった。そこで第四章では、伝統的な華北農村に関する歴史研究を手がかりにその由来を探った。結果、武術は匪賊（盜賊団）から村と家族を守るために生み出された男性的な身体文化であったこと、さらにその伝承の過程において富農層からは教養主義を、中農層からは相互扶助の規範を、貧農層からは地理的及び社会的移動といった要素を取り込んでいったことが明らかとなり、これらの諸要素が現代における武術文化と学歴取得・都市移住とのつながりを生み出す下地となつたことを確認した。

上記の研究を通じて、本論では日中における「不利な立場」にある人々の、スポーツを通じた格差問題への対処の試みが明らかとなった。結論ではこの知見を元に、制度の機能不全が多発する社会変動期には、スポーツが制度と現実のギャップを埋め、さらに從来は獲得困難であった財や機会を得る資源となりうることを指摘した。さらにこのスポーツを通じた生活環境の再編成への着目は、社会変動期における社会構造の再編成を行為者の視点から描き出す点で、社会構造研究に貢献しうることを確認した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「スポーツ」を手がかりに、人々は構造的格差にいかに対処し、その結果、格差がいかなる形で再編成されるかについて描き出そうとしたオリジナリティーあふれる業績である。H.ベッカーの枠組みを援用して、「スポーツ」は、格差・不平等という「共通問題」を解決するために「不利な人々」が用いる「共通の解決法」として捉えられている。

第一章ではJ.サグデンのボクシングに関する比較社会学的研究が検討され、本論文の分析枠組みが抽出される。都市貧困層の成功のための梯子というボクシングに関する常套的イメージは、アイルランドやキューバなどを比較対照する中で、「不利な立場」の人々が政治的・経済的・文化的コンフリクトに対処するための定型的行為へと再構成される。

第二章では日本のボクシング「文化」が取り上げられる。非進学高出身の「まじめで勤勉な」若者達が、「フリーター」層にいったんは組み入れながらも、ボクシングを継続する中でジョブ・マッチングへと至りつくありさまが、具体性豊かに描き出される。

第三章では、フィールドが中国に移され、それとともに、欧米に由来するボクシングから中國土着の武術へと焦点は移される。現代中国では、都市部において「武術」の専門学校が、小・中・高および大学の各レベルで数多く見られるが、その在学生の大半は農村出身者によって占められている。在学生へのインタビューを通して、農村部と都市部の間に横たわる厳しい教育格差、学力格差を与件として、農村部の子弟がより良き職業上のポストに就くために、武術学校をチャネルとして利用されているありさまが説得的に浮き彫りにされる。

第四章では、共産主義革命以前の華北農村を事例に選び、富農層・中農層・貧農層という三つの階層毎に「武術」という身体文化に対し、どのように異なる働きが期待されについて歴史的な考察が図られる。その結果、民間武術のあり方の相違が類型的に捉えられるとともに、現代中国の武術学校における武術イメージが「貧農層」のそれに由来することが手際よく明らかにされている。

以上、スポーツ・サブカルチャーを社会全体の特質と相関させながら、日本と中国の比較社会学が着実に展開されている本研究は、スポーツ社会学の今後における豊かな可能性を示唆するものであり、博士（人間科学）の学位にふさわしいと判定される。